

# 1月号 いっしん

第487号

令和8年(2026年)

発行：金光教加治木教会 〒899-5213 鹿児島県姶良市

加治木町朝日町130 発行責任者：矢野文枝 TEL/FAX 0995-62-2895

メールアドレス [hittobe.konkaji@gmail.com](mailto:hittobe.konkaji@gmail.com) (HP) <http://kajikikon.konjiki.jp/> 《HPの「いっしん」はカラーで見れます》

新正の  
年たつごとに  
信心も  
のび栄えてぞ  
花実とはなれ

甘木親教会  
初代教會長  
安武松太郎師御歿

立教167年／小倉教会布教141年／甘木親教会布教122年／加治木教会布教75年



※冠雪した桜島と錦江湾・加治木町網掛川河口周辺

令和八年の  
新春をお迎え

させていただいて

今日もまた神のみかげに我ありと  
喜びは人の心の真なり  
日々を喜び礼びてぞゆけ  
思えば樂し喜びの春

昨年は、小倉教会布教百四十年記念大祭、甘木親教会二代教会長安武文雄大人三十年祭が仕えられ、神願・師願にお報いさせていただきべく、参拝に御用に、それぞれの立場でおかげを蒙らせていたただくことができました。

本年は加治木教会布教七十五年記念大祭を五月十七日(日)にお迎えさせていただきます。

甘木親教会の初代親先生は、「ご布教される時、小倉教会の御用が山積していたため、ご布教を一年ほども遅らされました。そのことを小倉教会初代桂松平先生は、「わがことと下り坂は急がん者はないが、うちの安武は、わしが出よと言つても、出んと言う。家には七口八口(七、八人の家族)を抱えておりながら・・・」と語られたそうです。

これこそ、神願・師願を第一にされる御用(信心)姿勢であります。甘木初代親先生のお示しになられた「眞とは「恩を知つて「恩に報いること」という「信心を現わさせていただきたいのです。

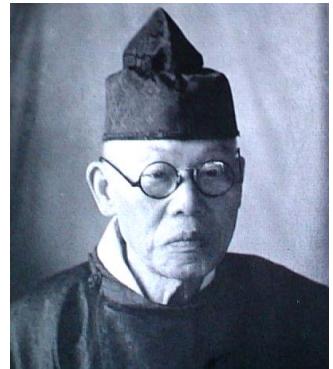
(教会長)

少年少女会「野外調理」… P1  
お知らせ… P7

『私の頂く安武松太郎師』… P2~7  
教会行事… P8

## 『私のいただく安武松太郎師』

(矢野政美著 昭和五十六年十一月発行)



安武松太郎師

母の姿もありました。その時、気丈な母の目にキラッと光るものがありました。

それは喜びと別離の悲しみ、前途を祈る交々の涙であったであります。

## 七、母の信念 (その一)

「先代（いれからは恩師の）ことをご先代と申し上げます。」の白口祭も済み、私ども夫婦は御神命のままでいただくことになり、父母は何ぐれとなく準備をしてくれましたが、母は特に深い祈りをかけてくれていったようあります。

いよいよ出発の日（昭和二十六年六月十七日）朝の御祈念後、多くの方々に見送られ、しっかりと御神靈を胸に抱いて、親教会を出発させていただきました。

甘木駅頭に数十名の方が、「万歳、万歳」と見送つてくださった中に、

「先代（いれからは恩師の）ことをご先代と申し上げます。」の白口祭も済み、私ども夫婦は御神命のままでいただくことになり、父母は何ぐれとなく準備をしてくれましたが、母は特に深い祈りをかけてくれていったようあります。

また、

「私は身体の具合で汽車に弱いから、加治木にお参りさせていただきたいけれども、それもできないから、先生がこうして親教会にお参りされるから、それを楽しみに待つてあります」

とも言い、父母とともに、一度も加治木にお引き寄せいただけなかつたことが、今思わせていただいても残念に思えるのであります。

母の心中には、「自分も一緒に布教させていただいているのだ」とい

う思いがあつたと察せられます。父は私が布教満四年後、母は五年記念祭の五日前に帰幽させていましたが、父母とも、布教当初のことであり、何一つ喜んでいたくこともできなかつたことを、今更ながら相済まない思いがするのであります。

私の布教史上に、終生忘れることのできないことがあります。それは、布教満三年が過ぎた昭和二十九年十月十九日のことです。

布教以来三年間、私なりに、一生懸命の気持ちで御用させていただいたつりであります。が、布教の実績は遅々として上がらず、お引き寄せいただく氏子もいっこうにその数が増えませんでした。

このようなことから、夫婦とも前途の希望を失つたような気持ちになりました。ずいぶん勝手な考えをしたので

した。

それは「じこか他の土地に転地布教をさせていただいたら、もっと御用に立たせていただくことができるのではないかろうか」などと、夫婦して語り合つた結果、意を決して親教

会にお参りをさせていただき、現親先生（二代文雄師）に、いわゆる進退伺いをさせていただいたのでした。

十九日の朝、親教会に着かせていただくと、ちょうど母の姿も御結界の前にありました。

何の行事もない時にお参りをさせていただいたので、母は心中不審に思つたことあります。

親先生に一部始終を申し上げ、

「私のような不徳な者では、どうてい御用に使つていただけそうにございません。勝手なことでありますけれども、とにかく他に転地させていたくわけにはまいりませんでしょうか」とお伺い申し上げますと、親先生はしばらくお考えのようすがありました。

「それはひどかろう。しかし、転地布教というようなことはできない。そのような事情であれば、一應引き揚げてくるのもよからう。そうして腹が決まつたら、また布教に出していただけば良いのだから」と仰せ下さいました。

その時の、親先生の心情はいかがであられたであろうかと、誠に申

し訳ない思いで一杯であります。

わらに、先代親奥様（初代シケ親奥様）からも、

「それは仕方なかろう。一度帰つてきたがよからう」との意味のお言葉を頂きました。

その時の私は、率直に語つて親教会に引き揚げさせていただくことは、あまり氣乗りがしませんでした。

でき得る事なら引き揚げずに、そのまま宮崎県あたりに移りたいなどと、虫の良いことを考へていたので、大いに迷いましたが、

「親先生・先代親奥様があのようないに仰るのだから、そうさせていただくばかりに仕方あるまい」と心に思いながら、思い余つて実家に母を訪れました。

母はさきに教会から帰つていましたが、私の顔を見ると「何事ね」と問うので、母には何もかも打ち明ける心になつて、すべてを語らせていただくときの決心を忘れたのか」と、強く諭してくれました。

また、そのとき入浴中であった父も、風呂から上がって来て、その事を聞くや、「あんたは加治木に出していただくときの決心を忘れたのか」と、強く諭してくれました。

「そこに私の腹が決まりました。

「それでは、お父さんお母さん、そんなにさせてもらいますから」と答えて家を出ましたが、道路まで母と義姉が見送つてくれました。

それは、

「あんたが商売か何かであれば、こいでは思うように行かないから、

他の所に代わるどこのことよりもかろうが、お道の御用というものはそんなものではなかろうと思う。あんたは甘木を出る時、加治木の土になしていただくという決心で行ったのではなかつたのですか。その決心はどうしました。加治木で打つて鳴りぬ太鼓は、どじで打つても鳴りません。それを鳴らさうと思えば、太鼓のバチが折れるまで、皮が破けるまで打たせていただけば、必ず鳴ります。

あんたが一生かかつて道が開けんでも良いではないね。あんたが死んだのち、後をついでくださる人が繼ぎやすいようにしておけば、それで良いではないね」と、泪ながらに励ましてくれました。

母は何度も後悔から、「辛抱しなさい」「辛抱しなさい」と、繰り返し言いました。

その時の父母の心、また、親先生、先代親奥様のみ心が、私には痛いほど感じられました。

やがて親教会へ戻り、親先生に、「心得違いをしておりました、やはり加治木の土にならせていただきます」と申し上げますと、親先生は、「ううな、そりやあ良かつた」と喜んでくださいました。

私は往きの憂うつな思いとは打って変わって、明るい心で帰途につかせていただきました。

荷物の整理までして、私の帰りを待ち受けていた家内も、帰った私から事の次第を聞き、「それでは、ここでおかげ頂きましょう」と臍を固めさせていただいたのでありました。

それから私は、気持ちも新たに、元気にならせていただきました。それまでは自分の至らなさは知りつても「この土地が悪い」「この人柄が悪いから」とか、「前の先生が引き揚げられた後だから、御用が難し

い」とか、他に対する不満の心がなかったが、それが大きな間違いであり、結局至らないのは他人ではなくて自分であると気付かせていただきました。

「何のこの土地が悪かろうはずがない、天地金乃神様のお土地だもの、人が悪かろうはずがない、天地金乃神様の可愛いみ氏子だもの。」と考えさせていただくようになり、それから、この土地の繁栄を願う気持ちになり、また、毎朝御祈念後に、前の教会長平島只助師の奥津城に、お参りさせていただくようになります。

それから徐々におかげを頂き、昭和三十五年十月に現在のお土地を求めさせていただいて、神様をこの遷座申し上げたのであります。

また布教当初の頃、このようなこともありました。

最初借らせていただいた家は、一軒建てではありました、六坪ばかりの小さな家で、御神前、御結界が四畳半、お広前が四畳半でありました。休ませていただく部屋（ケイ）をおわして、一畳敷を自分で作らせて

いたぐれどを費用として、実家に相談したことがあります。送金を依頼した手紙の返事に、「送ったが良いか送らないが良いかを、御取次頂いたら、それは送らない方が本人のためと仰せになつた」などを作りました。

「何のこの土地が悪かろうはずがないことにします」という意味のことを書いてきました。

一時は親を恨むような気が起きましたが、送つてやりたいが送つてやれないという親の心の方が、どちらかづらかったであろうかと、後になつてわからせていただいたような次第でした。

この他に挙ぐれば数限りなくあります、あれやこれやと思わせていただきますと、私どもの布教の上に、どれほどの父母の祈りがあり、特に母の思いが深かつたことかと、ここに布教二十年記念大祭を迎えるに当たつて、その当時のことが懐かしく思い起しられるのであります。

ある時（母の晩年）義姉（フジ）が母に、「お母さん、お教会の婦人会に出席させていただぐと、皆さんが、矢野さんはお母さんがしつかりした信心を頂いておられるからと言

われますけれども、私は、まだお母さんから信心のいちばん大切なところを聞いておりませんが、どこがいちばん大切なところでしょうか、秘訣があったら教えてください」と、問うたことがあります。

母は、

「それはまだ言えない、私が死ぬ前に遺言に残していくから」と答えと、私に聞かせてくれました。

更にまた、

「私はかねがね、こう思わせていただいている。この家の財産は皆、親先生の御取次によって、親神様からお預かりしたもので、我が物というものは一つも無い。それで、私が死んだ後に、もしあ道のことで、全財産を無くすようなことがあっても、私は、でかした、ようやってくれたと礼を言います」と「あなたには話せるから」と付け加えて、話したことがあります。

なお、母は常々、

「私は、父さん（主人のこと）よりも早く死ぬようなことがあってはならないと思っている。父さんが亡くなられたら、その翌日でも良い。そ

うでないと父さんが不自由をされるから」と、また、

「私は、神様からお引き取りいただくときは、農家の忙しくない、人様に迷惑をかけないような時季におかげ頂くようにお願い申し上げている」とも語っていました。



晩年の矢野クラ刀自と矢野仁吉郎翁

母の晩年、私が親教会にお引き寄せいただき、母に会いたくなつて、実家を訪れました。ちょうど母は、繭から生糸をひいていましたが、非常に喜んでくれました。暫くして暇なをして家を出まし

たが、峰の原（実家から約六〇〇メートルのところまで来ると、もう一度母の顔が見たくなり、引返していくこともあります。何かしら、温かい懐かしい母がありました。

昭和三十年十月二十六日、父は七十五歳をもつて安らかに、「親先生と皆さんに御礼申し上げてくれ」と言い残して、お国替えさせていただきました。

父帰幽後の母は、その悲しみの中にも、父の靈の安心を祈るとともに、信心の継承を祈り続けていました。

また、信心のつながりというものは、こんなにも有り難いものかとしみじみ思わせていただくことは、母と嫁と、さらに孫の嫁との仲が、眞実の親子のように心のふれ合いがありました。

私の妻（サダ子）も、

「三奈木の実家の父母よりも、堤（私の実家）の方のお父さんお母さんが、ほんとうの親のような気がします」と、折にふれて言つていまし

## 八、母の帰幽

た。

母はまた、孫たちにも、信心を強いる事はしませんでしたが、心中では、一心にそのことを祈り続けていました。折にふれて感じさせていただきました。

孫達が教会にお参りすると、とても嬉しそうに私に語ってくれました。

母は、いわゆる七黙三言型で、言葉少なく言うのであります。その言葉の中には、引きつけられるほどの、シャンとしたものがありました。昭和三十一年、加治木布教満五年の年を迎えていただきました。母も、心からそのことを喜んでくれ、何くれとなく心を使ってくれていました。

その記念祭を、三月十八日に奉仕させていただきすべく、親先生に御取次を頃いて、期日を決定させていただき、その準備に一同大忙でありましたが、同月十三日夕刻、甘木より至急の電報が届きました。それは、「ハハシス スグ ハイ」という母の死を報せるものでありました。

晴天の霹靂とはこのことを言つての

だろつか。率直に言つて、その時は私は驚きと悲しみで、何も彼も投げ出したいような気持ちがありました。

それは、布教五年記念祭を迎えていた。内容の中に、親神様、金光様、親先生のみ祈りの千万分の一にも報答し奉りたいとの願いと、これまで陰に陽に布教の力になつてくれた母に喜んでいただきたいとい

う一念が、母の死によつて絶たれたようには思えたからであります。取るものも取りあえず、信者であり、また家主でもある松田モト氏に後のこと頼んで、親子三人で夜行列車に乗つて甘木へと向かわせていました。

十四日の明け方親教会に着かせていただき、母の生前の御礼を申し上げ、実家に駆けつけると、母の遺体は奥の間に安置してあり、さながら、スヤスヤと眠つているようで今にも目を覚まして声をかけてくれるような気がするほどがありました。

実にも、母のかねての願いどおり、

主人に先立つことなく、父の帰幽後百三十七日目に、後を追うように身退させていただき、しかも、その日まで人の手を借りることもなく、農閑期で時候の上にもお繰り合わせ頂き、七十五年の生涯を、ただ、「有り難う」をいいます」との一言を残して閉じさせていただいたのであります。

「お母さん、永々とありがとうございました」と、お礼とお別れの言葉を捧げさせていただきました。

母の臨終のようすを聞けば、十三日の朝、「今日はどうも気分が悪い」と言つていた。ですが、夕刻に「不浄に行き、そこで倒れたとのことでした。

「有り難う」をいいます」と、ただ一言、言い残して意識不明になりましたが、約一時間後には、安らかに息を引き取らせていただいたとのことでした。首筋の大動脈が切れたようで、入棺の折、背中一面に紫色の内出血の跡がありました。

主人に先立つことなく、父の帰幽後百三十七日目に、後を追うように身退させていただき、しかも、その日まで人の手を借りることもなく、農閑期で時候の上にもお繰り合わせ頂き、七十五年の生涯を、ただ、「有り難う」をいいます」との一言を残して閉じさせていただいたのであります。

謹仰を、「矢野クラ美真心刀自之靈神」と頂き、葬儀は翌十五日、安

武文雄親先生ご祭主のもとご執行いただき、遺骨は加世熊の墓地に父仁吉郎真秋翁の奥津城と並んで埋葬させていただきました。

母逝きて既に十五年、当教会の布教二十年記念祭を奉迎させていただくて、今更ながら、その当時のことが偲ばれ、今は共々に幽冥の安武恩師のみ許にあって、加治木布教の御用の上に、大きな力となつて働き続いている父母の願い成就のおかげを蒙らせていただきたいと、朝夕祈り続けさせていただいている現在の私であります。

師を偲びおやを偲びて

つづぬらみ

(おわり)

政美

昭和五十六年十一月十三日  
金光教加治木教会発行

矢野政美著

今年、令和八年は加治木教会布教七十五年のお年柄で、五月十七にお仕えさせていただきます。その記念事業として『わたしのいたぐ安武松太郎師』(矢野政美著)を加除訂正し、若いただくこと葉づかいに改め、再版させていたくことを考え準備を進めています。

30	29	28	23	22	21	20	19	15	14	12	10	9	1
(火)	(月)	(火)	(月)	(火)	(月)	(火)	(月)	(火)	(月)	(火)	(月)	(火)	(月)
●越年祭	清掃御用	●月例祭(天地主共勵会)	教誨御用(農耕所)	連布教協議会(加治木)	県教誨師会実行委員会(西本願寺長)	金(月)御本部布教功労者報徳祭	金(月)教誨御用(農耕所)	連布教協議会(加治木)	県教誨師会実行委員会(西本願寺長)	金(月)御本部布教功労者報徳祭	金(月)教誨御用(農耕所)	連布教協議会(加治木)	金(月)御本部布教功労者報徳祭
13時半	10時	13時半	10時	10時半	10時半	10時半	10時半	10時半	10時半	10時半	10時半	10時半	10時半

## あじひと

加治木教会行事記録

12月

※『いっしん』十一月号のおやすみなどでお知らせが遅くなりました。

末長いお幸せをお祈り申し上げます。



令和七年十月十八日、木村優斗さん

## ご靈神様のお立

一月

中村宗吉 之靈神(4日)昭和61年

松田常衛門之靈神(4日)大正9年

星原靖一郎之靈神(4日)令和6年

中村正義之靈神(5日)昭和21年

内村ハルエ之靈神(6日)昭和59年

長尾千津子之靈神(7日)令和5年

有馬幸子之靈神(9日)平成16年

西本五男之靈神(11日)平成15年

瀬戸マツエ之靈神(11日)平成27年

濱口勝次之靈神(11日)昭和27年

前田正蔵之靈神(13日)昭和39年

瀬戸セミ之靈神(14日)昭和56年

小屋敷勝之靈神(14日)平成1年

信國鈴子大刀自之靈神(20日)平成5年

中島ふさ之靈神(20日)平成16年

福山瑞枝之靈神(20日)平成21年

山本博敏大人之靈神(22日)令和7年

瀬戸俊子之靈神(23日)平成27年

柳園義男之靈神(24日)昭和8年

本中野イセマツ之靈神(25日)昭和59年

岡山工ク之靈神(25日)平成20年

桐野仲助之靈神(27日)昭和21年

瀬尾清之靈神(27日)昭和41年

向江フキ子之靈神(27日)昭和41年

令和5年

1. お先祖のご靈神様の、現世・幽冥(かくろゆう)でのお働きあつての今日の私たちあります。立日の日には、故人を偲び、玉串を奉てんしてお礼を申し上げましよう。

教会では、十日の月例祭時に、1.玉串で靈前で靈祭詞が奏上され、玉串の奉てんを準備しておきます。

一月 三日（土）

## 甘木親教会年頭参拝

一月六日（火）十時半より

甘木親教会

## 少年少女会

## 鏡開き・七草

※おかがみ餅を焼いてのせんざいと  
七草たこ焼きを作ります！

一月十日（土）十時半より

加治木教会 月例祭に併せて

## 成人感謝祭 奉仕

※成人者、玉串奉奠・記念品授与。

一月一十五日（日）十時半より  
鹿児島地方教会連合会 場所・鹿児島教会

## 定期総会

※一教会、教師一名、信徒一名の出席にて開催。昼食お弁当持参。

## 寒中一斉信行

一月二十六日～二月六日

ご祈念・研修（午前十一時）  
報徳祭奉迎

教会行事

令和八年

1月

1	（祝）●元日祭	正午
6	（火）★少年少女会「鏡開き」	10時半
9	（金）清掃御用	10時
10	（土）●月例祭・成人感謝祭	10時半
11	（水）清掃御用	10時
12	（木）●月例祭・共励会	13時半
13	（土）少年少女会年次総会①日	（午後）
14	（土）連合会定期総会	（午後）
15	（日）連合会定期総会	（午後）
16	（土）清掃御用	10時

2月

1	（日）●報徳月例祭	10時半
4	（水）甘木親教会初代立日御祈念	11時
8	（日）多良木教会報徳祭	11時
9	（火）清掃御用	10時
10	（火）●月例祭	10時半
11	（水）矢野政美大人立日御祈念	11時
12	（火）●甘木親教会報徳祭	11時
13	（土）甘木親教会「同益会」	
14	（日）清掃御用	10時
15	（土）清掃御用	10時
16	（日）●加治木教会報徳祭	11時
17	（土）清掃御用	10時

感詠（教長）

育成も記念事業や目標で  
人のこと嫌に思えば吾を恥じ  
人が育ちて城と伝えり  
人のこと嫌に思えば吾を恥じ  
己に足りぬ礼びにつとめ  
おかげたまわることを数えぬ  
風邪をひき病気のし損してないか